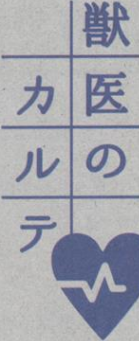


ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp



16



坪島獣医科医院
(富山市大泉北町)
坪島 あおい

動物好きの人なら、たくさん犬や猫に囲まれて過ごす「多頭飼い」に憧れるでしょう。多頭飼いは喜びが多い反面、苦勞も伴います。病気との関連から考えてみましょう。

【犬】

犬同士の感染症の予防がまず必須です。ウイルスや細菌性の病気に対しては混合ワクチンを接種します。ダニなどの体表に付く寄生虫(外部寄生虫)と回虫等の体内に寄生する虫(内部寄生虫)はチェックをして、必要なら薬を使います。

雄と雌の発情(体が大人になって相手を求める)を巡るトラブル

多頭飼育とけが・病気



は、不妊手術(卵巣や精巣を切除する)で解決します。また個々の犬が安心して過ごせるサークルやクレートを用意して、給食や睡眠の場にするとういでしょう。病気によって絶食や療法食が必要になっても、個々のスペースがあれば苦勞しません。

感染症の予防不可欠

以上の点に気を付けて飼育しても、相性の悪さや突発的な事件でけんかが起こることがあります。犬は顎の力が強いので、大型犬はもちろん、小型犬同士でも相手に致命傷を与えることがあります。雌同士でも起こります。一度そうしたことが起きたら、すぐに原因

比較的強固なため、化膿に気付くのが遅れ病巣が広範囲になることがあり、完治に時間を要します。パーソナルスペースを確保することがトラブルの予防になります。

【犬と猫】
外部・内部寄生虫の中には、犬と猫を行き来するものがありま

を分析して対策を立てる必要があります。

【猫】

猫固有の感染症の予防や不妊手術は犬の場合と同様に必要です。また猫は自分の縄張りに敏感です。それが保たれないと膀胱炎になったり、けんかが起きることもあります。猫のかみ傷は致命傷になることは少ないものの、皮膚が

10年間一緒に暮らしている猫。それぞれの縄張りを保つよう注意しよう

す。そのチェックは大切です。猫は夜行性で犬と行動パターンが違うので、それぞれのスペースが必要で、また、犬から猫が逃げられるようなキャットウォーク(高所に避難できる場所)の設置も大切です。

多頭飼育を上手にしておられる人に共通しているのは、観察の深さです。個体の食欲はもちろん、尿や便、飲み水、動作など細かいチェックが、病気やけがの早期発見につながるようです。